



【研究主題】

**豊かな関わり合いを通して、
主体的に学ぶ子どもの育成**



さいたま市立東宮下小学校

〒337-0012

埼玉県さいたま市見沼区大字東宮下215番地1

TEL：048-685-3652

FAX：048-685-5119

1 学校概要

本校は、創立46周年を迎えたさいたま市見沼区の郊外にある見沼田んぼに隣接する。児童126名、通常学級6学級、特別支援学級2学級の小規模な小学校である。外国籍由来の児童も多く、その一方、何世代にもわたって地元で農業を営む家庭の児童も在籍している。学校を取り囲む環境は豊かな自然に恵まれており、校庭の敷地に約200㎡の畑がある。本校は、地域の自然の豊かさを生かした体験活動を中心に据え、主体的に生きる児童の育成を目指している。

2 研究概要

(1) 研究のテーマ及びテーマの設定理由

テーマ：地域に根ざした豊かな体験活動を通して主体的に生きる児童の育成

選定理由：本校は豊かな自然環境に恵まれ、地域の協力を得ながら開校2年目から全校行事として米作りを現在も継続して行っている。体験活動の制限されたコロナ渦で始まったヨーロッパ野菜栽培も現在5年目となる。今年度は地元企業・地元農家・学校での3者連携で取り組みながら、栽培を通して食のありがたさ、地域に感謝するという視点をさらに加え、「主体的に生きる力」を体験活動を通して育んでいきたいと考え、テーマに設定した。

(2) 研究計画

○研究のねらい

学校内外の体験活動から児童が地域の方々とさまざまな生き方や考え方にふれ、自ら進んで考え、学んだことを人生や社会に生かそうとする「主体的に生きる力」の育成を図る。

○研究スケジュール ※（ ）は実施学年 GT：ゲストティチャー

月	ヨーロッパ野菜作り（5・6年）	米作り（全校児童）	その他
5		全校田植えGT：地元農家	
6	活動のテーマ・目的の決定	稲作についてきこうGT：地元農家	さつまいも植え（全）
7	「日本の農業」GT：トキタ種苗 地元農家へ苗の育成依頼 「魅力ある商品企画・販売」GT：ネスレジャパン		枝豆収穫 （チャレンジスクール）
9	苗の植え付けGT：地元農家	全校稲刈りGT：地元農家	
10	販売準備（広告・CM作成等）	東宮下米販売（PTA）	
11		宮下祭り（餅つき体験・新米でおにぎり）（PTA協力）	柿もぎ体験（特支） 地元農家に学ぶ（3）
12	収穫・販売		地元農家に学ぶ（2）
1	収穫・販売		
2	販売収益の会計・支払い 利益の使い方の話し合い		
3	研究紀要作成		

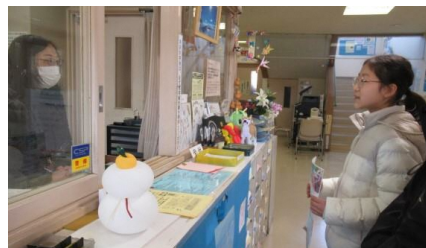
3 研究の取組

(1) ヨーロッパ野菜作りを通した体験活動

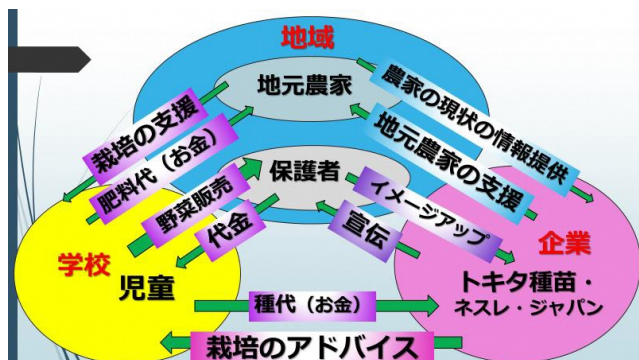
①ヨーロッパ野菜作りは今年で5年目となる。児童数の減少が続き、今年度から5・6年生が合同で総合的な学習の時間で学ぶこととなった。昨年度から地元農家のご協力を得て、敷地内にある畑に地元農家のトラクターが入り、土の質や状態が大きく変わり、野菜の成長度合いが急激に向上した。また、今年はトキタ種苗から教わったヨーロッパ野菜だけでなく、地元農家のアドバイスから、ダイコンも栽培することとなった。



②毎年、野菜販売の前に代表児童が近所の公民館に訪問する。公民館を利用する市民の方に、野菜販売の宣伝をしてよい自作のチラシを使って公民館職員に交渉する。ここでG T ネスレジャパンの学んだスキルを使って交渉に臨み、地域の方の理解と協力があって野菜の販売が成立することを学ぶとともに地域のつながりを深めるきっかけとなっている。



③年2回のヨーロッパ野菜販売では、各グループが立ち上げた株式会社の理念に基づいて販売活動を行っている。土曜授業とタイアップさせることで保護者・地域の方のご協力が得やすい環境を設定している。児童達は、販売する野菜のおいしい調理方法や無農薬野菜であることを必要に応じて相手に伝え、この収益は、自分たちが育てた野菜の苗代や肥料代として地元農家に支払っている。保護者のみならず、地域の方も購入し喜んでいただくことで、児童にとって達成感を得ることができ、充実した体験活動となっている。



④本校のヨーロッパ野菜作りは、地域・企業・学校の3者が左の図のように連携しながら行っている。ヨーロッパ野菜を育てることが地域のみならず、保護者も巻き込む形となった。児童達の中には地元の農家にもっと貢献できることはないか、若者の農業離れを問題視する児童も意見も出ており、キャリア教育の一部を担っている。

(2) 米作りを通した体験活動

- ① 本校では、地元農家のご協力のもと、学校の近くの田をお借りして、毎年5月に田植え・9月に稲刈りを全校児童で取り組ませていただいている。苗の植え方、刈り方等、米作りの過程のほんの一部だが手作業で行うことで米作りの大変さを体験している。稲刈りの際、落ち穂を拾う児童が増え、米一粒を大切にしようという意識が以前より芽生えてきた。



- ② 5年生の総合的な学習の時間で、刈った稲を地元農家からいただいた千歯こぎや足踏み式脱穀機を使って脱穀体験を行った。精米するには大変な労力があることに気づいた貴重な体験であった。



- ③ 11月に行われた東宮下まつりでは、1年生が餅つきを体験し、また、全校児童で収穫した米でおにぎりを作り、親子で食した。親子で新米を味わう体験は食への関心を高める機会となった。



(3) その他の体験活動

- ① 今年度は地元農家の繋がりから他の農家のご協力もあり、さつまいもの栽培の機会をいただき、全校児童でさつまいもの苗を植え、収穫体験もできた。
- ② ヨーロッパ野菜を栽培しない時期に枝豆を栽培し、夏休みのチャレンジスクールで保護者・教職員・地元農家と参加児童で収穫し、塩ゆでにして食した。
- ③ 毎年、地元農家のお庭で柿もぎ体験をし、渋柿をおいしく食べる実験に取り組んだ。



4 成果と課題

豊かな自然環境に囲まれた中での野菜栽培・米作りの体験活動は、自らの手で育て収穫する喜びを味わうだけでなく、その喜びをお世話になった方により多くの人に伝えたいという動機が児童のさらなる感動体験につながっている。販売した野菜の収益は、今年度も苗代、肥料代として支払うこともできた。

農業の知識や経験のない教員のみでは、現状の活動は困難を要する。今後も栽培する野菜の選定・農業技術・販売方法を専門するゲストティーチャーを活用し、保護者・地域を巻き込んだ地域に根ざした開かれた教育課程の構築と「この活動を通して、自分は地域に何ができるのか」という問題意識をもった児童の育成に努めていきたい。